

言葉を科学する：人間の再発見

Day 3 ちよつとだけ feedback

とてもよい質問やコメントが毎回たくさん書かれています。全てに答えることはできませんが、全体へ feedback するのがよいと思われるものの一部だけ。

授業全体の理解を深めるためにも、時間を見つけて必ず目を通しておいてください。その上で、さらにたくさんコメントや質問に挑戦してください。そのような姿勢が一層理解を深める助けになります。

・Q：言語間に優劣はないといていたが、現に世界の数ある言語の中で、「英語が世界の共通語」と位置づけられているのはなぜか？

***A：とても重要な質問です。まず、「優劣がない」というのは、どの言語も豊かで複雑な体系をもっていること、人間の子供であれば誰でも自然状態でその言語に触れて育つだけで身につくという点で、どの言語も同じということです。次に「英語が世界の共通語と位置づけられている」というのが本当かどうかはわかりませんが（これを客観的に示すのは簡単ではないと思います）、少なくとも多くの研究分野や政治・ビジネスの世界では、言語を異にする人たちが集まる場合に、共通の道具として英語が使われることは多いようです（でも世界の多くの人々は、日本人も含め英語以外の自分の母語で日常生活を送っています）。ただし、このような現状は、英語が「言語として他の言語よりも優れているから」というわけではありません。英語を母語とする国（古くはイギリス、その後アメリカ）が、ここ 200 年ほど政治的・経済的（戦争も？）に強かったという偶然的要因によるものです。それ以前のヨーロッパでは、たとえば、学問の世界の共通言語はラテン語でした。それはローマ帝国が政治的に強かったからでしょう。ニュートンの『プリンキピア』もラテン語で書かれていますね。これから 200 年後 500 年後の地球で、どの言語がどの分野で共通の言語として使われているかは予測できません。**

・Q：言語はどの言語も平等であるとはどうしてもそう思えない。日本語を母語とする私にとって、すでに 10 年以上も勉強しているはずの英語はやっぱりまだぜんぜん理解できないし、ドイツ語やハンガリー語はそれ以下である。なぜ、外国語は話せるようにならないのか。

***A：上記の質問同様、どのような観点から見ることが問題です。複雑で洗練された体系を持つこと、人間の子供であれば誰でも話されている環境で育つだけで獲得できるという点でどの言語も平等です。単純な体系しか持たず、単純なことしか表現できない自然言語はありませんし、特別な訓練を意識的に続けなければ子どもが母語として獲得できないほど「難しい」言語もありません。一方、ある言語を一度母語として獲得したあとは、別の言語を獲得するのは、さまざまな理由で難しいようです。自分の母語と系統的に近い、あるいは地理的に近いこと共通点が多くなっている外国語の習得は比較的やさしいのに対して、母語とタイプが大きく異なる外国語の獲得は難しくなるでしょう。そしてどちらの場合でも母語のように流暢になかなかないという点は共通しています。母語と異なる外国語が母語のように**

獲得できないのは、多くの事例を見る限り本当のことに思われますが、ではその理由はなにかというと、はっきりした本当の理由はよくわかっていないと思われます。

・Q:両親が別々の言語の母語話者であるような家庭環境で育てば、複数の言語を使いこなせるようになるのだろうか？

*A:重要な質問です。まず「使いこなせる」の定義がむずかしくですね。実際に、多言語が家庭内や地域で使われている環境（ヨーロッパ等世界のさまざまな地域で珍しいことではありませんし、日本でも国際結婚の家庭ではそのようになっていることが少なくないでしょう）では、子どもは複数の言語がある程度できるようになっています。ただし、一個人が読み書きも含め複数の言語が全く同じレベルで母語となっているという例はほとんどないように思われます。家では広東語を話していても学校教育は、英語のような場合、学校でだけ学ぶ内容は英語で読み書きしたりディスカッションする方がやりやすいでしょう。フランスとの国境近くに住んでいるドイツの家庭の人（母語はドイツ語）は、しばしばフランス側に行き物に行くので、買い物に必要なフランス語は流暢ですが、フランス語で学術論文を読んだり書いたりにはあまりできないでしょう。つまり買い物言語としては「使いこなせて」いるかもしれませんが、学問をするための言語としては「使いこなせていない」ということになります。WebTubeの「参考Reading資料」のBilingualismを読んでみてください。

・Q:言語というものがコミュニケーションの必要性から生まれたのか、それとも社会性や思考といった他の要素の延長線上に位置するものなのか、あるいは、多様な声を出せる人間にとって、言語という形が、意思疎通するのに適していたからなのか、根本的な理由を知りたいと思った。

*A:これはとてもとても興味深い問題です。哲学的な問題で、おそらく経験的・客観的な論拠から結論が出る問題ではないかもしれません。しかし、このようなことをきちんと考えておくことはとても重要です。そうしないと、きちんとした論拠があるわけでもないのに「言語はコミュニケーションの必要性から生まれた」ということを信じてしまうかもしれません。言語に限らず人間が進化の過程で得た資質を「機能」の面から説明しようとする方法は慎重でなくてはなりません。偶然得られた資質が、たまたまある機能を果たすために偶然使われているに過ぎない可能性が常にあるからです。また、言語がコミュニケーションのために発達した資質であるなら、なぜ、言語はコミュニケーションに不向きな特性をたくさん持っているのかが謎になります。道を教えるのに言語は決して優れていません。地図を見せたほうがはるかに早い。また、誤解を生むような、いくつかの異なる意味に解釈できる言語表現もたくさんあります（これからの授業でもいくつか紹介します）。さらには、言語がコミュニケーションの必要性から生まれたのなら、なぜ、通じないような方言があるのか、同じ人間の言語同士なのに外国語はなぜ分からないのか、ということがとても大きな謎になります。これらの謎・問題に合理的に答えることができなければ、「言語はコミュニケーションの必要性から生まれた」とは簡単には言えないのではないかと思います。

・Q:事例研究を見ると、主観・客観の敷居がどこにあるのか、わからなくなってしまった。たとえば、実験の「忙しい彼」が変かどうかというのは定性的にどう評価できるだろうか？

*A:とても重要な問題です。言語学が経験科学である限り、つまり人間の頭の中で実際に起こっている自然現象を説明しようとするものである限り、何らかの物理的・生物学的事実が存在するはずで、それを客観的にデータ化するのは、不可能ではないと思われますが、今のところ決してやさしい問題ではないと思われます。

・Q: 言語に関する仮説や理論には、なぜ、答えのないものが多いのですか？また、結論を出さないことはありなのですか？

***A: 最初の2回は、やや哲学的な（つまり客観的な答えはないかもしれない）言語にまつわる問題を考えましたが、この授業で扱っているタイプの言語学は、自然科学の一分野ですので、物理学や生物学と同じ意味での結論を目指して研究しています。この問題に関しては授業を進めていく中で、少しずつ考えていきます。原理的に答えがない問いと、答えはあるはずだが現時点では分かっていない問いとを、区別して考える必要があります。**

・Q: 実験である程度その仮説が正しいのか間違っているのかを示すことができるのだが、果たしてその実験方法を採用してよかったのかなど100%そうであると自信を持ってその仮説を検証しようとすることは、非常に難しく実際には不可能なことなのではないかと感じた。

***A: これもとても重要な問題ですね。この授業を進めていく中で少しずつ考えていきましょう。1つ注意しなければいけないことは、物理学や化学のようにかなり進んでいる自然科学の分野でも、ある仮説を検証するための実験方法が適切であるかどうか、100%自信を持って検証を行うことはできません。分野や検証の方法によっては、これまでの長い研究の歴史の積み重ねのおかげで、限りなく100%に近いものが確立されている場合もありますが、それでも経験科学である限り、100%ということはありません。それに向かって絶え間なく精度を上げていく努力を続けているわけです。この授業で取り上げているタイプの言語学は、それらの分野に比べると、仮説もその検証方法ままだまだ、はるかに未熟ですが、やろうとしていることの本質は同じです。**